

スペイン・インフルエンザと高知県

公文豪

一、はじめに

宮尾登美子氏の小説『權』に、主人公喜和の夫岩吾が、流行性感冒に襲われた高知の貧民街に米を配つて救済に奔走する姿が描かれている。

この流行性感冒の悪辣さと来たら、今も知る人達が一つ話の種にしている程で、罹った人は数知れず、死んだ人は高知市だけでも六百人を超えたと云はれてゐる。この感冒は、とくに貧乏人と年寄と妊み女を狙ひ打にするのだと皆が云ひ、またほんたうに熱の為に頭が可笑しくなつて狂ひ死にした人や、咳の為に気を失つたり手足が引吊つた儘元に戻らない話など、貧乏人や年寄の多い裏町辺りからより多く聞えて来る。妊婦の死亡や死産流産も相次ぎ、後にこの年生れの子供が小学校へ上る時、生徒は例年の半分にも充たなかつたと云

はれてゐる。

大正七年（一九一八）年、高知県民を恐怖のどん底に落とし入れた流行性感冒の猛威に触れた文章は『權』以外には見当たらない。『高知県史・近代編』は一言も触れず、調べてみたが、本県では「スペイン風邪」に関する論文を一本も見つけ出すことはできなかつた。風邪は毎年流行しており、大正七年にはいつもと違つて多数の罹患者と死者を出して過ぎ去つたにすぎず、人々は「スペイン風邪」と呼んでその恐怖を記憶の片隅にとどめたが、結局は一過性のもので歴史的には大した意味がないと判断したのであろうか。

ところが、新型インフルエンザ出現の脅威が高まる中、この大正七年の「スペイン風邪」は、これまでに人類を襲つた空前かつ最悪のインフルエンザとしてあらためて注目を集めようになつた。

例えば、平成二十一（二〇〇九）年二月、新型インフルエンザ及び鳥インフルエンザに関する関係省庁対策会議が定めた『新型インフルエンザ対策行動計画（改定）』は、冒頭で「新型インフルエンザは、毎年流行を繰り返してきたインフルエンザ・ウイルスとは表面の抗原性が全く異なる新型のウイルスが出現することにより、およそ十年から四十年の周期で発生している。ほとんどの人が新型のウイルスに対する免疫を持つていないため、世界的な大流行（パンデミック）となり、大きな健康被害とこれに伴う社会的影響をもたらすことが懸念されている。

二十世紀では、一九一八年（大正七年）に発生したスペイン・インフルエンザの大流行が最大で、世界中で約四千万人が死亡したと推定されており、我が国でも約三十九万人が死亡している」と述べている。

この年（平成二十一年）四月、メキシコで確認された新インフルエンザの流行は、またたく間に世界各国へ拡大し、六月には世界保健機構（WHO）が警戒水準をフェーズ六に引き上げて「パンデミック」であることを宣言。翌年八月に同機構が世界的大流行行の「終結宣言」を行うまでの間、世界で百二十万

六千人以上の人々が感染し、九千九百三十三人が死亡したとされている。わが国でも、内閣総理大臣を本部長とする新型インフルエンザ対策本部が設置され、空港、港湾は防疫体制を強化、国内各地の医療機関や保健所が相談窓口を設け、公共施設には消毒薬が置かれ、街にマスク姿の市民が激増したことは記憶に新しいところである。

その後も、鳥などを媒介して突然変異する新型ウイルス出現への脅威は続いており、本年四月には『新型インフルエンザ等対策特別措置法』が成立し、五月から施行されている。

大正七（一九一八）年のパンデミックに関する研究書は、アレフレッド・W・クロスビーの名著『史上最悪のインフルエンザ』（一九七六年、邦訳・みず書房）、速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』（二〇〇六年、藤原書店）などがある。加えて大正十（一九二一）年に内務省衛生局が出版した調査記録『流行性感冒』が東洋文庫で翻刻（二〇〇八年、平凡社）された。世界と日本における「スペイン風邪」の爆発的大流行について知ろうと思えば、この三冊をもって十分と言えよう。

ただし、高知県の大流行については、速水融の労作でさえ僅か一頁割いているにすぎず、内務省衛生局の『流行性感冒』も県がとつた対策と罹患・死亡統計を掲載しているだけで、詳しいことは殆んど判らない。

本稿は、こうした研究上の空白を埋め、九十四年前の「スペイン風邪」が高知県民にどのような被害をもたらして走り抜けていったのかを明らかにし、現在すすめられている新型インフルエンザ対策の参考に供しようとするものである。

二、高知県への第一波襲来

一九一八年（大正七年）のパンデミックは俗に「スペイン風邪」と呼ばれているが、スペインに始まつたものではない。クロスビーは「もしこれであくまでも専門性を持った当時の医師たちが同時代に書き残した記録だけにもとづく立場に立てば、新型のインフルエンザはこの年の三月に合衆国で出現したと言わざるをえない」としている。⁽¹⁾

クロスビーの研究によれば、同年三月、デトロイトのフォード自動車会社では一ヶ月間に一千人以上

の労働者がインフルエンザで休み、カリフォルニアの刑務所では一千九百人の囚人の内五百人が罹患して三名が亡くなるなど、各地で国民が「カゼ」にかかりていた。とりわけ兵士で過密状態のキャンプ地で流行し、軍隊はインフルエンザ・ウイルスの温床となつた。時は第一次世界大戦の真最中で、同年三月には、ヨーロッパ戦線に向かつて航海中の合衆国陸軍第十五装甲機動連隊を肺炎の流行が襲い、三十六名が発症し六名が死亡した。軍用船によって大量の兵士と共にヨーロッパ戦線に持ち込まれたインフルエンザは、四月にイギリス軍、五月までにフランス軍、さらに有刺鉄線の向こうで敵対するドイツ軍にも襲いかかり、敵味方の区別なく、それぞれの部隊の戦闘能力を低下させ作戦変更を余儀なくさせるほどに蔓延した。第一次世界大戦におけるアメリカ軍の戦没者約十万名の内、その八割がスペイン・インフルエンザによる病死だつたと言われているほどである。

やがてインフルエンザは軍隊から市民の間に広がり、五月には北アフリカ、六月にはロシア、インド、中国、ニュージーランド、フィリピンに達し、マニ

ラでは港湾労働者の四分の三が寝込んで港の機能が麻痺した。航空機もない時代、スペイン・インフルエンザはたった四ヶ月で地球を一周し、八月後半再び北米へ上陸したときには、人から人への感染過程で変異して前代未聞の強い病原性を持つウイルスとなつて爆発的に大流行し、人々の命を奪つた。その詳細なドキュメントはクロスピーの著書に譲るが、世界中の死者は約四千万人以上に及び、感染者の総数は挙げることが不可能なほど空前絶後の猛威をふるつたのである。

それでは、この変異したウイルスは、日本へいつ襲来したのだろうか。初発の断定は到底不可能であるが、内務省衛生局は、第一回流行を「大正七年八月下旬にして九月上旬には漸く其の勢を増し、十月上旬病勢頓に熾烈となり、数旬を出でずして殆んど全国に蔓延し、十一月最も猖獗を極めたり、十二月下旬に於て稍々下火となりしも翌八年初春酷寒の候に入り再び流行を逞うせり」と述べ、第二回流行は「八年十月下旬」、第三回流行は「大正九年八月上旬」に始まつたとしている。そして、「流行の当初に於ては患者多発するも死亡率少く（略）、流行の終末に近

づき又は次回の流行に於ては患者数少きも死亡率著しく多く（略）、肺炎等の危険なる合併症は後期に於て之を来すもの多きが如し」と、後になるほど死亡率が高まつたことも指摘している。⁽³⁾

速水融の時期判断は内務省衛生局の報告と多少ずれており、全国の新聞報道を丹念に蒐集して検討した結果、襲来を「大正七（一九一八）年九月末から一〇月初頭」とし、軍隊・学校が起点となつて三週間のうちに全国へ拡大したと見てている。そして、これを「前流行」、翌八年十二月から始まる流行を「後流行」と呼び、内務省衛生局と同じく「前流行」は罹患率は高いが死亡率が比較的低く、「後流行」は罹患率は低いが死亡率が高かつたと特徴づけた。⁽⁴⁾

感染は、交通頻繁な都市に発して周囲村落へ放射状に侵襲し、学校、工場など集団の場ではたちまち閉鎖のやむなきに至るほど瀰漫した。かくしてスペイン・インフルエンザは悪性の度を強めながら繰り返し襲來し、日本における死者は約三十九万人にのぼつた。これは関東大震災の五倍近い人的被害である。

高知県へのスペイン・インフルエンザ第一波の被害で

来は、大正七年十月二十日前後と思われる。同月二十五日の『土陽新聞』は、前年十月三十日に土佐郡鴨田村上空で墜落・慘死した米国飛行家フランク・チャンピオンの一周年紀念祭典を、鬼頭良之助が主催し土陽、高知両新聞社の後援で十月三十日（雨天の場合は十一月三日）柳原で執行することを伝えている。その一方で、翌二十六日には北米東部都市の感冒患者が二万余人にのぼり、さらに西部サンフランシスコに侵入し、シンガポールでの死亡者夥しく、インドのポンペイでは一日の死亡者が七百名に達していると報じていた。記事を読んだ人々が、これを対岸の火事視していたか、すでに足下が浸潤されつあることに不安を覚えていたのか知る由もないが、どういうわけか風邪で寝込む人が目立つて増え、おそらく他人事のように受け止められない不安な状況に置かれていたのは確実であろう。

意等につき通牒を発したことを伝え、高知師範学校で六十名、第一中学校で八十名、高知商業学校で五十名、県立高等女学校で百名の患者が出、悪寒、高熱、腸痛、嘔吐の症状はあるが、「歐洲に流行せるのとは絶対に違ふのであるから感冒に罹ったといつて無闇矢鱈に恐れることは要らない」という赤松県技師の見解を報じた。また、某医師の談として、「インフルエンザは人より人に直接伝染する者である。それは患者の口(くち)雨、咳、吐息及インフルエンザ菌の附着せる痰汁を直接に吸入することにより伝染するものである。故に一家族内に誰か一人患者ができると他の者は余程注意しなければならぬ。されば医者等も患者に只薬のみを与へることをしないで一般に予防上の注意を与へることにしたい」と予防の大切さを訴えている。

しかし、県庁の医師が県民がパニックに陥らぬよう気休めのような事を言つても、すでにこの時期、フランク・チャンピオン紀念祭の広告が掲載され、雑報欄にその式次第が載った十月二十九日付『土陽新聞』には、同じ紙面で「中学校の感冒数百名に上る」という見出しで、前日に県が各郡市長に予防注

分けてその模様を詳述しよう⁽⁵⁾。

【学校】

殆んどが罹病し、四、五名出勤しても半病人で仕事にならず、配達遅延等のこともあるため、通常八頁の紙面を二頁で発行せざるを得なくなつてゐたのである。

十月三十日の『土陽新聞』は、「感冒益々猖獗^{しょうけつ} 病菌一市七郡に瀰漫し感冒ならざる処無し 為めに学校は休業し通信業務は渋滞す」、翌三十一日には「感冒の暴威^{ひまん} 益々猖獗となりて全滅の家も多い」との見出しで猛威をふるうインフルエンザの状況とその被害を伝え、やがて広告欄には黒枠の死亡広告が激増することになる。もはやフランク・チャンピオン一周年紀念祭どころではない。さすがの鬼頭良之助もこの流行性感冒の襲来には勝てず、十一月一日、紀念祭は「悪疾流行の為め無期延期」に追い込まれてしまつた。

三、高知県内で猖獗を極めた流行性感冒

高知県におけるスペイン・インフルエンザ第一波の被害状況を、以下、大正七年十月二十九日から十二月一日までの『土陽新聞』『高知新聞』の記事から拾い、「学校」「軍隊」「職域」「患者数と死亡者」に

数百人の児童・生徒が日々生活を共にする学校は、真っ先にスペイン・インフルエンザの標的となつた。大正七年十月二十九日現在、高知市内の各小学校は第一で二百三十五名、第二で二百余名、第三で百八十一名、第四で二百余名、第五で四百三名、第六で百九十名、高等小学で八十名の患者者がおり、なお続々感染の模様で、高知市は第五小学校に臨時休校を命じた。翌三十日には、県立第一中学校、第二中学校、同師範学校、同高等女学校、市立高知商業学校、私立土佐高等女学校、高知市立第一、第二、第五、第六、高等の各小学校、三十一日には高知市立第三、第四小学校、第一、第二幼稚園が臨時休校。十一月一日から江ノ口小学校、県立農林学校が閉鎖となり、県師範学校女子部は生徒一同に帰郷を命じた。

郡部では、二十九日から吾川郡浦戸小学校、長岡郡三里小学校が休校。同日、十月十八日から大阪奈良へ修学旅行に出ていた安芸の県立第二中学校四年生全員が感冒にかかり、四年生が臨時休校した。そ

の後、同校では罹病者が続出し、生徒百九十六名、教諭四名の多数に達したため、十一月一日ついに臨時休校に追い込まれた。三十一日には、須崎尋常小学校が二百五十名、同高等小学校が五十名の患者数に達して休校。室戸小学校では二十八日から三十日までに生徒百十三名が学校を休んで校長が対応に苦慮していると伝えられ、高岡郡川内村尋常小学校は九十名、同郡黒川村尋常小学校は四百名の患者が出て授業閉鎖した。また香美郡赤岡尋常小学校は教員八名の内五名が欠勤、生徒百二十余名が罹病し、なほ欠席者が増えつつあった。

十一月に入ると、学校閉鎖は一気に拡大する。同月六日付『高知新聞』は、長岡郡で香長尋常小学校、浜改田尋常小学校、大篠尋常小学校、国府尋常小学校、久礼田尋常高等学校、五台山尋常高等学校、土佐郡で鴨田尋常高等学校、桑尾尋常小学校、下知尋常小学校、旭尋常小学校、香美郡で野市尋常高等小学校、さらに県立第三中学校が相次いで閉鎖となつたことを報じた。また同日付『土陽新聞』も、高岡郡で斗賀野、吾桑、加茂、佐川、久礼、東津野等の尋常小学校が閉鎖になつていることを伝えていた。

郡部の尋常小学校も、十一月下旬頃から次第に再開の方向に向かう傾向がみられたが、同月二十七日の土陽、高知両紙によれば、安芸郡三十一、香美郡もはや県下七郡で開校している所はごく稀な状態であつた。

高知市内のスペイン・インフルエンザ第一波は、三週間ほどで峠を越えたようだと伝えられている。高知市役所が各学校教員に戸別訪問をさせて調査したところ、十一月九日現在の罹病生徒は四千五百余名で依然深刻な状況はあるが、全体としてみれば「漸次終息」の傾向がみられるようになつたと報じ、十一月二十二日付『土陽新聞』は「感冒はウント減つた」死亡者の数も尠くなり火葬場も大分ヒマになつた」との記事を掲げている。市内では同月二十日前後から授業を開始する学校が出始めたが、しかし、これは一時の小康状態だつたようで、十二月一日には県立農林学校、海南学校が休校に追い込まれ、私立高知実科高等女学校も罹病者百八十名に達して五日間休業、市内の小学校で授業中なのは江ノ口小学校だけという状態がなお続いた。

九、土佐郡八、長岡郡六、幡多郡七十二の小学校及び分教場で閉鎖が続いていた。もつともこの数字は記事の内容が錯綜していて甚だ不正確なものであるが、それでもこの時期、感冒は高知市から放射状に感染地域を広げ、終末期には安芸郡や幡多郡など遠隔地で猛威をふるつていた傾向を読み取ることができよう。

【軍 隊】

内務省衛生局がまとめた『流行性感冒』は極めて精緻なもので、その科学的知見、調査報告書としての水準の高さは瞠目に値する。しかし、軍隊におけるスペイン・インフルエンザの流行、その罹患・死亡者数は、軍事機密に属するためか調査対象になつておらず、その統計は日本におけるスペイン・インフルエンザの実態を正確に反映したものとはいえない。このため、速水融は『日本を襲つたスペイン・インフルエンザ』の中で軍隊での流行に一章を設けて詳細に解説しているが、高知県一県にかぎつて言えば何の手もつけられていない。

それでは高知県の郷土部隊、歩兵第四十四聯隊内

でのスペイン・インフルエンザの罹患状況はどうであつたか。

驚くべきことに、十月三十一日付『土陽新聞』は、「朝倉聯隊にては全員一千六百名の中一千五百數十名の罹病者あり卅日香川県下に於ける第十一師団の秋季機動演習参加の為め出発の予定なりしが止むなく中止し十一月三日出発に決したるが病勢の如何に依りては更に延期するやも知れず」と報じている。

次いで十一月二日の同紙は、「一時殆ど全滅の有様なりし歩兵第四十四聯隊にては昨今病勢稍々衰へ将校中にも教練し得る程度に快復したる者數名ありて幾分か活気を呈するに至りたるが来る三日出発演習地に向ふ筈にて準備中なり因に堀内聯隊長は今尚引籠もり居れりと」と伝えている。つまり、十月下旬から朝倉聯隊は聯隊長以下兵士のほぼ全員が感冒にやられ、軍隊としての機能を完全に失っていたわけだ。

右の記事の内容はほぼ正確で、県立歴史民俗資料館所蔵の稿本『歩兵第四十四聯隊歴史』も「十一月四日 香川縣下ニ於ケル機動演習參加ノ爲出發、是ヨリ先キ十月二十二日流行性感冒患者發生シ爾來一

週日後ノ患者數下士以下一千四百六十二名ニ達シ本月三日漸ク恢復セシ兵員ニ對シ嚴密ナル健康診斷ヲ行ヒタル結果演習ニ堪ヘ得ル見込ノ將校以下參百拾名ヲ以テ出發ス（爾後同一方法ニ依リ同六日九十八名同八日百四十名同十日六十九名ノ追及部隊ヲ以テ逐次演習地ニ出發ス）と記録している。この公式記録から、スペイン・インフルエンザの高知県への襲来が十月二十日前後であつたこと、一時、歩兵第四十四聯隊には健康な兵士が百三十六名しかいなかつたという途方もない事実を確認することができる。

十一月五日付『高知新聞』によれば、健康診断で

演習に堪え得ると診断された第一陣の堀内連隊長以下三百十名は、病後であるため背嚢等は後送、すべて軽装で出発した。記者は、第二、第三陣が順次出发しても「到底全員の三分の一にも充たない」と嘆息し、この間、鎌田少尉以下下士官一名、卒二名が死亡したと報じた。

軍隊内の流行が峠を越えたのも、学校と同じく十一月下旬だった。同月二十三日付『土陽新聞』は「第十一師団管下各隊に於る流行性感冒は猛威を振ひ、歩兵第四十四聯隊は千五百名の患者を出し内將校二

名下士一名、兵卒十二名死亡し、丸龜十二聯隊は九百名にて内將校一名下士一名、兵卒三名死亡し、徳島十二聯隊は患者小数なりしも一名の將校死亡者を出したるが、其他騎兵十一聯隊は二百二十名、野砲兵十一聯隊七十名、輜重兵一大隊は百二十名の患者あるも死亡者なく、歩兵四十三聯隊及び工兵一大隊は二三三名の患者ありしのみにて殆ど皆無に等しく、全部を通じて終熄に向ひつゝあり」と書いている。これによれば、歩兵第四十四聯隊における感冒の流行は、四国の各聯隊中、最も悲惨なものであつた。

さらに十二月一日の同紙は「朝倉聯隊の病勢衰ふ」との見出しで、「一時殆ど全滅の有様なりし歩兵第四十四聯隊では昨今病勢稍々衰へ將校中にも教練し得る程度に快復したる者數名ありて幾分か活気を呈するに至りたるが来る三日出發演習地に向ふ筈にて準備中なり因に堀内聯隊長は今尚引籠り居れり」と報じており、隊内での流行は四十日ほど経ても、なお一気に終熄とはいかなかつた模様が推知できる。

【職域】

パンデミックが、高知の教育を麻痺させ、軍隊を一時的に壊滅させたことを見てきたが、産業経済に与えた打撃が強烈であつたことは言うまでもない。

十月末には、高知郵便局で電信課員が全滅、電話局、郵便係、さらに郵便局長まで感染して倒れ、電話の受信、打電ともに一切休止となつた。銀行、会社、各官庁は、罹病者多数のため事務が渋滞。高知市中の大商店は、店員全滅のため臨時休業し、高知、

武田、楠の三大病院、さらに市中の全医院には患者が充满して診察及び投薬に支障を生ずる状態となつた。

料亭得月楼の芸妓は二十六日夜健康だつた者は僅か八名。料亭大貞は三十日に芸妓二十四名中十二名の患者を出し、中店では三十名中二十三名が倒れ、一名の死亡があつた。

十一月に入ると、感冒は益々暴威をふるい、ついに高知地方裁判所、検事局が全滅して民事、刑事の公判はすべて延期され、県庁、高知市役所等も全滅に近く、高知県立図書館は館員全員が罹患して一週間

間の臨時休館に追い込まれた。

高知警察署管内では、下知と五丁目の両派出所に各一名勤務するだけで、市内派出所の巡査は全員寝込んで空っぽとなつた。高知署の内勤巡回の出勤も三名に過ぎず、殆ど全滅状態となつた。佐川警察署は署長以下全滅で、駐在巡回を召集して署務を整理させているうち巡回部長が肺炎を併発して死亡した。

高知監獄では、在監者総数八百二十六名中三百名が就床者となつて一名が死亡し、看守八十余名中四十余名が欠勤した。

前述のように新聞事業も氣息奄々で、十一月五日には『土陽新聞』が「本社配達人及び通送人中流行性感冒の為め欠勤者多数あり隨て配達遅延の向有之哉も計り難く御座候へば切に読者の寛恕を乞う」との社告を掲載。対する『高知新聞』も、翌六日付のコラム「小社会」で、この頃は高知新聞社の活版部から庶務部、発送部まで順次侵され、ついに編集部まで食い入つていまや全滅状態だと内情を明かした。

興行界への影響も深刻で、高知座の歌舞伎、堀詰座の淨瑠璃興業は直接大打撃を受け、活動常設館の鳳、世界、出雲、第二鳳の各館は日曜、祭日の昼間

興業をすべて中止した。実際のところ、人々は感染を恐れて芝居、活動見物どころではなかつたである。

また、土佐電気鉄道株式会社は欠勤者が多くて殆ど運転中止。内海巡航株式会社も運転士、機関士、水夫等の罹病者が多くて欠航がちとなつた。車夫、自動車運転手、車掌等の罹病者も多数にのぼり、高知市内の交通機關はほぼマヒ状態に陥つた。

日曜市では、感冒患者が増えて果物の需要が高まつたにもかかわらず、感冒に罹つて出店者が少なく、他の事情も加わつて品薄となり、柿一つ二十五銭、鶏卵一個十銭と目玉が飛び出るほどに高騰していると報じられた。

郡部では、治療に追われる医師が感染し、十一月

二十日に長岡郡五台山村の小兒科医大野養順、同じ頃、幡多郡下川口宗呂の開業医岡林寿三郎が死亡した。佐川町では開業医七名の内六名が罹患して多数の患者の不安甚だしく、須崎は郡役所、水産試験場、銀行等が殆ど全滅状態で「町内を走る處各戸殆ど病者あらざるなく市街寂寥たる状況」となつた。中村町でも感冒は猛烈を極め、各官公署はことごとく侵さ

れた。

一方、死亡者が多くて棺が払底し、通常三十五円のものが六、七十円に値上がりし、大工がにわかに棺屋となり、医者と薬屋を筆頭に「カゼ成金」が続出する皮肉な現象も生まれたという。

スペイン・インフルエンザは、貧富の差や社会的地位に関わりなく人々の命を奪つた。実業家の中にも感冒から余病を併發して死去する者があり、十一月五日には南海醸造株式会社常務取締役南鹿藏、十五日には土佐商工連合会副会頭・高知商業會議所常議員・陶磁器商組合長入交源十郎が犠牲となつた。

【患者数と死亡者】

十月下旬に感冒がもつとも暴威をふるつっていたのは高知市とその近傍で、高知市の罹病者総数は一万数千、市民はいずれも戰々恐々で顔色なしと報じられた。郡部への伝播は多少遅く、同じ時期の幡多郡中村町の患者は三十名くらいで流行は始まつたばかりだつた。

十一月に入ると死亡者が増え始め、高知市役所戸籍係は死亡届の処理で大繁忙となる。高知病院内科

部長片倉医学博士は「今度の感冒は熱が四十度以上あり、余病併発のため死ぬものが大部分を占めてゐる」と語つており、實際、余病を併発して死亡する者が多かつたことを十一月十三日付『土陽新聞』が次のように報じてゐる。

僅か十二日間に三百七名死亡す

感冒故の死者百七十余名

驚く可し高知市の死亡率

当市に於ける流行性感冒は既報の如く昨今漸次下火に向ひたるが、昨日高知市役所の戸籍係に

就き取調たる所に依れば、十月三十日より十一

月十一日に至る十二日間に於ける死者総数は実に二百七名の多数にして中男九十七名、女百十名なるが、感冒の為め死亡したるものは男

二十八名、女三十七名その中男の子八名、女の

子六名を示し、肺炎及肺結核、心臓麻痺他の為

死亡したるものは総数百四十二名にて、右の中

感冒の為め死期を早めたるもの百余名ありて、

全然感冒の為め死亡したるものに非ざれど他病

にて感冒に罹りて死亡せしは百余名に達し、

一日の如きは前日日曜なりし関係上六十四名

の死亡届提出ありて係員を驚かしたり。而して一日平均の死亡者は十六人なり。

また、宮尾登美子氏が『權』の中で描写しているように、スペイン・インフルエンザは貧困層により過酷な打撃を与えた。十一月十六日付『高知新聞』は「悪感冒の産む悲惨 下層階級は生活上に大打撃 県下で毎日数百人死亡」との見出しで、「救済機関設置の急務」と題する主張を掲げ、治療費の軽減、医療費の無料化、無期限貸与などの対策を講ずるよう訴えた。

(略) 此感冒の慘害は或は一時的の現象かも知れぬけれど、單に慘害のままに放任して置くのは愈々害毒を増大ならしむるのみならず下層階級をして生活上に大打撃を与ふことになる。

高知市又は地方で下層階級に在る者で此悪感冒に罹らぬ者ではなく、大切な稼ぎ人に病みつかれた上に幾人の家内が枕を列べて医療の手当だも受くる能はず空しく煎餅蒲団に包まれて呻吟して居るが多数にあるのを続々として認められる。斯うなると一家は米価が騰貴した所の騒ぎではなく、往々稼ぎ人に死なれてしまふので一

家は路頭に迷ふ有様になる。此種下層者は感冒手当は到底医者になどかり切れないでの大概は売薬で間に合はせる、それも売薬を用いるのは上等の組で、悲惨なになると只ウン／＼と唸つて寝て居て自然に快復するのを待つといつた光景だ。近日感冒は悪性の能率を益高めて来て居るのに、これでは徒に死を待つに等しいと言はなくてはなるまい（略）。

中島高知市長が吏員を派遣して細民の中でとりわけ生活困難な者を訪問慰藉させたところ、十人の家族が皆倒れて枕を並べている家もあり、雨天その他で収入のない日には路傍のちり箱から菜葉のごときものを秘かに拾つて帰り僅かに飢えを凌いでいる家族もあつたという。これが大正期、高知市内に存在した細民窟の実態で、中には棺を買う金がなく、水葬で済ませたという話も報じられている。

郡部における感冒の猖獗は、学校閉鎖の報道のほか詳細に知ることができないが、十一月二十一日付『高知新聞』が伝える「（幡多郡三崎村では）十一月に入り患者を出し僅に数日にして漸次増加し三崎益野両校も多数の欠席児童を出し十一日より頓に増加

し十三日より十七日迄閉鎖すること、なり尚漸々増加の有様にて死亡者も多く戸毎罹病者なき家なく一家残らず臥床の家などあり」という状態と大同小異であつたに違いない。

死亡者の中には、著名人も多くいた。東京では、十月二十九日、劇作家島村抱月が流行性感冒で死去し、のちに女優松井須磨子が後追い自殺したことは有名な話である。この他に末松謙澄、大山捨松らが「スペイン風邪」の犠牲になった。十一月四日、土佐出身の元勲土方久元伯爵が亡くなつたのも、感冒に罹り肺炎を併発したためである。また、十二月六日には板垣退助の五男六一、翌八年三月五日には福岡孝悌も流行性感冒に罹り、助膜及び肺炎を併発して死亡した。高知では、十一月七日に土陽美術会の長老柳本素石が感冒療養中に心臓麻痺を起こして急逝した。二十日には片岡健吉の長男啓太郎の妻秀雅も亡くなつてゐる。

内務省衛生局編『流行性感冒』の調査数値によれば、同局が「第一回流行」とする大正七年八月の初発から翌八年七月三十日の終熄までの間、高知県では総人口七十万三千八百九十九名の内十四万七千二

百五十三名が罹患し、その内九百二十四名が死亡したことになっている。患者百に對する死亡率は〇・六三%である。死亡者の内八百三十六名は、大正七年十月下旬から翌八年一月十五日まで三ヶ月足らずの間に死亡したものである。

ところで、スペイン・インフルエンザ第一回流行（大正七年八月～大正八年八月）による死亡者数が一万人を超えるのは、兵庫一万四千七百三十人、東京一万三千五百七十四人、大阪一万一千二百八十人、埼玉一万六十五人の四都府県で、広島九千四十一人、北海道八千五百七人、福岡七千二百六十二人がこれに次ぎ、他の諸県は三千～五千人代となっている。

意外なことに、高知県の患者数は沖縄に次いで少なく、死亡者数九百二十四人、死亡率〇・六三%という数値は全国で最も低いものである。四国の他の三県の死亡者（死亡率%）は、徳島四千四百六十五名（一・八六%）、香川六千二十八名（一・五一%）、愛媛五千六百四十三名（一・一二%）で、これと比較しても実数、比率ともに高知県は各県よりもはるかに少ない。

もとより人口規模の多寡は大いに關係しているで

あろうが、猖獗を極めた割に高知県の患者数、死亡者数がこの程度で終わつた理由はよくわからない。

當時、高知県で講じられた県民に對する啓發と予防措置は、

「簡易マスク」家庭製作方を示したる簡単なる予防心得書十万部を印刷し各戸に配布し尚絵画入注意書二千枚を各要所に貼付し一般に予防注意を喚起せしめたるが本県は主として実行容易にして比較的効果ありと認めらるる「マスク」の使用奨励に努めたり。

といふものだつた。感染予防のためのマスク着用とうがいの励行は、内務省衛生局が各府県を指導して極力この普及をはかり、どの府県でも精力的に取り組まれた報告があるから、これが特別に効果を挙げたということにはならない。あるいは交通機関や工場等の未発達、人家の散在などの社会的条件、気候や地形などの自然的条件等が影響していると考えられ、今後の研究が必要である。

もつとも、速水融氏はその著書で、「流行性感冒」の巻末に附せられた「流行性感冒患死数調査票」の患者・死亡者は不完全なもので、患者数・死亡者数

を過小に計算する結果になつてゐると批判し、独自の試算によつて全国の死亡者数は四十五万人を超え、高知県では前流行で三千四百十四名、後流行で一千四百四十五名、合計四千八百五十九名が亡くなつたと推定している⁽⁹⁾。これは現在政府が公表している『新型インフルエンザ対策行動計画』の記述にみられる死者約三十九万人に近い数字である。

速水氏の試算や政府の『行動計画』の死亡者数に基づけば、高知県における大正七年のスペイン・インフルエンザの死亡者は、内務省衛生局がまとめた九百二十四名をはるかに超えるものであつたということになる。

四、終わりに

以上述べて来たように、大正七年のスペイン・インフルエンザの第一回流行は、高知県でも三ヶ月近くの間猖獗を極め、県民を恐怖のどん底に陥れた。その後、大正九年までに第二回、第三回の流行があり、死亡率はむしろ後の流行の方がはるかに高かつたが、患者数は第一回流行に比べてかなり少ないと本稿ではこれに言及することはしなかつた。

大正七年十月下旬から八年一月半ばまでの短期間、内務省衛生局の報告でも九百二十四名、速水融の試算によれば三千四百十四名もの死者を出した史上最大のインフルエンザの猛威は、「喉元過ぎれば熱さ忘れる」の類いで、その後、誰もこれを記録にとどめるようなことはしてこなかつた。

明治、大正時代は衛生状態が極めて悪く、コレラ、天然痘、赤痢などの伝染病が毎年のように流行し、命を落とす県民が少なくなかつた。例えば明治十八年には赤痢で七百七十九名、翌十九年にはコレラで一千三百五十二名もの人が死亡している⁽¹⁰⁾。大正五年にもコレラ、赤痢などで四百四十二名が死亡しており⁽¹¹⁾、同七年以後に繰り返された「スペイン風邪」の流行は、たまたまタチが悪くて、いつもより多い死人が出たに過ぎないものとして誰もが記憶の片隅へ追いやつてしまつたと思われる。

しかし、これは「風邪」ではなかつた。トリやブタ・ヒトを宿主とするインフルエンザ・ウイルスが、H1N1型という極めて凶暴で毒性の強いウイルスに変異して人類に襲いかかってきたものである。現在最も脅威となつているのは、鳥インフルエンザか

ら新型インフルエンザとなりヒトに感染するH5N1型ウイルスの出現で、これに対してもワクチンもタミフルも万能でないことが常識になつてゐる。

もちろん現在は医療技術が飛躍的に発展し、感染症予防対策の充実、情報の高度化と人々の知識向上、生活環境の著しい改善などで、大正七年頃とは全く異なる条件下で私たちは生活している。だが、その一方で、当時とは比べものにならないほどの交通網の発達、人口の都市集中、企業規模拡大など、いつたん感染性の高いウイルスが出現すれば、またたく間に爆発的大流行になり得るというリスクを背負つてゐることも忘れてはならない。その意味で、大正七年の「スペイン風邪」大流行は、最悪の場合、この新型インフルエンザの出現によつて再現されるかも知れない出来事であることを、私たちは念頭に置いておくべきであろう。

〔註〕

(1) アルフレッド・W・クロスピー『史上最悪のインフルエンザ』四二頁。

(2) 内務省衛生局編『流行性感冒』一〇四頁。

(3) 『同右』一一一～一二二頁。

(4) 速水融『日本を襲つたスペイン・インフルエンザ』九九頁。

(5) 以下の記述はすべて『土陽新聞』『高知新聞』によ

る。主要なものは記事の掲載日を本文に入れたが、

紙数の関係もあり、細かなものについては註記しな

い。

(6) 内務省衛生局編『流行性感冒』一〇六～一〇七頁。

(7) 『同右』一九六頁。

(8) 速水融『日本を襲つたスペイン・インフルエンザ』二三四～二三六頁。

(9) 『同右』二五三頁。

(10) 明治二十年度『高知県統計書』。

(11) 大正九年度『高知県統計書』。